

# 高杉晋作の詩想 —「狂」と「儉生」—

有馬卓也

## はじめに

筆者は先に「幕末・明治期の漢学者―変動期の知識人研究への視角―」<sup>(1)</sup>に於て、幕末維新期から自由民権運動期へと至る知識人（漢学者）の、漢詩による思惟・志向の考証を核としながら、当時の時代精神の諸相を再編成しようとする試みを提示した。本稿は、その各論の一つとして、西南辺境型諸藩<sup>(2)</sup>の志士の典型とも言える長州藩士高杉晋作（一八三九―六七）の漢詩を考証し、彼の詩想の一端を明らかにせんとするものである。とりわけ、今回は、文久二年の上海渡航を境に変容する「狂」と「儉生」という二つのモチーフに着目して論を進めていくことにする。

尚、高杉晋作に関する基本的な知識は、従来の夥しい研究書・一般書<sup>(3)</sup>に譲ることとし、本稿では高杉詩と書簡を中心に考えていく。

## 第一章 吉田と供にあった頃

高杉が久坂玄瑞（一八四〇―六四）や桂小五郎（一八三三―七七）らと共に吉田松陰（一八三〇―五九）の高弟であり、彼の松下村塾に学んだことは周知の事実であるが、彼はその門を叩く（安政四年）以前から藩校明倫館でも学んでいた。<sup>(4)</sup>高杉が一八・九歳の頃である。その当時彼が詠んだ詩に次のようなものがある。

人生元一夢	人生 元 一夢
須尽逸豪娛	須らく逸豪の娛しみを尽すべし
自笑我心拙	自ら笑ふ 我が心の拙
終身学腐儒	終身 腐儒を学ぶ

（「自笑」安政三・四年頃）

変動する時代であるから、学生達の問いは当然の如く、経世済民に関わる事ながら、即ち日本の情勢・列国の意図・藩政のゆくえなどであった。しかし明倫館に限らず、当時の藩校の教師達が講ずるものは、中国古典を基とした旧態然とした

経学や兵学などが主流であった。ここに見える「腐儒」は、「迂儒」「俗儒」などとともに、当時の若者が藩校の儒学者達を非難する語として頻度の高いものである。<sup>⑦</sup>このことは、結局、明倫館での講義は高杉を始めとする若者達のニーズに答えられるようなものではなかった、ということを示している。では、時代の、若者のニーズに答えられるような教師とはどのような存在だったのか。それは若者と同じ感性を持った、新しい視点を有する者であった。勝海舟（一八二二―一九九）、安井軒息（一七九九―一八七六）、佐久間象山（一八一―一八四）、広瀬淡窓（一七八二―一八五六）、そして長州に於ては、安政三年、勤王思想を有した僧黙霖（一八二四―一九七）と論争し、論争敗北の後に一気に討幕へとステップアップした経歴を有するほどの過激さをもった吉田松陰がまさにそれであった。<sup>⑧</sup>

では、高杉が何を求めていたのか、又、吉田との間にどのような応答がなされていたのかを書簡から見てみたい。まず高杉の久坂宛書簡である。

「僕、愚鈍と雖も、文章家と為り著述を致し、天下の書生に名を知られんの、経学を致し默言持重空論を以て、人をだましたいの、博学になり天下の俗物に名を知りたいの、と申すかしこがりは、もうと仕りたく御座なく候」<sup>⑨</sup>（安政六年四月一日）

「かしこがり」という在り方や、「空論」という語に彼は強い嫌悪を懐いている。もちろん、これは単なる学問の否定で

はなく、実践（行）の伴わない学問（知）の否定、所謂「知行合一」の思想であることは言うまでもない。このことの論証は、彼と吉田との往復書簡の中に見える。

「僕（吉田）、足下（高杉）と交を納むるは、徒に読書稽古の為のみに非ず。固より将に報国の大計を建てんとすべなり」<sup>⑩</sup>（安政五年二月十一日）

「読書稽古」は目的ではない。それらは「報国の大計を建てる」という目的のための手段にすぎないことをここで吉田は言っている。また高杉の吉田宛に

「孰れ外夷払はねば、何れ相叶はず候故、……私儀以為らく、何れ天下戦争一たび始り致さざれば、外患去り申さず候」<sup>⑪</sup>（安政五年十月六日）

とあって、「外夷」「外患」に対する意識の強さを見て取ることができる。加えて吉田の高杉宛に

「今日天下の事、実に空言にては行はれ申さず。……今の時勢、最早墨行と申す時には之れなき様覚え候」<sup>⑫</sup>（安政五年十一月十八日）

とあり、吉田の言にも「空言」なる語が確認できる。両者の時宜に即した学問を媒介とする師弟関係を垣間見ることができる。いずれも陽明学的「知行合一」に根ざした知識の実践化を述べている。いわば実践を伴わない知識人、所謂頭でっちな知識人の否定に他ならない。互いの認識の重点が実行にあったことが確認できる。

高杉が決して学問そのものを否定していないことは先に記

した。つまり学問（読書）から得た知識の實踐に重きを置いていたということである。このことは次の清水清太郎（一八四三―六四）への詩からも了解できよう。

江頭分手日西傾 江頭分手すれば 日 西に傾く

遊子此時客心驚 遊子 此の時 客心驚く

一語寄君君記取 一語君に寄す 君記取せよ

読書勿作読書生 読書するも読書生と作る勿れ

（「臨別示清水清太郎」文久二年一月二日）

「読書するも読書生と作る勿れ」とは、学問は決しておろそかにしてはならない、しかしそれだけで終わってはならない、学問で得た知識を實踐せよ、ということである。この高杉の立場は、まさに師吉田の教えに他ならない。

## 第二章 上海渡航

さて、文久二年（一八六二）、二四歳の時、高杉は第一次上海遣使の一員として上海に旅立つ。<sup>14</sup>当時の中国は太平天国の乱（一八五―六四）の末期にあり、上海も毎日のように砲声が鳴り響く状況であった。当時の志士たちの中でも、実際に外夷に侵される中国を目の当たりにした例は少なく、極めて貴重な体験であると言わざるを得ない。とりわけ実践を旨とする高杉の詩作・行動に大きな影響を与え、高杉はこの上海渡航を期に「狂生」へと変質していく。本章では高杉が上海渡航時に記した『遊清五録』<sup>15</sup>を手がかりに、彼が上海で何

を見、何を感じたのかを検証する。

さて上海の情況については『航海日録』の五月六日上欄外記に

「支那人は外国人の役する所と為る。憐れむべし。我が邦遂に此のごとからざるを得ざるか。防に務むることは是れ祈る」<sup>16</sup>（『航海日録』）

とあり、また『上海掩留録』の五月二十一日に、

「熟つら上海の形勢を観るに、支那人は全く外国人の便役のため、英法の人、街市を歩行すれば、清人、皆、避けて傍に道を譲る。実に上海の地は支那に属すと雖も、英仏の属地と謂ふもまた可なり」<sup>17</sup>（『上海掩留日録』）

とあって、所謂夷狄の跋扈する上海を甚だ遺憾としている。

これは「支那上海港の形勢及北京風説大略」と記された文に上海渡航を振り返って、

「日本にも速に速に攘夷の策を為さずんば、遂に支那の覆轍を踏むも計り難しと思しなり」<sup>18</sup>

と言っていることから理解できよう。ここに見て取れるものは、外圧の圧倒的な威力の高杉自身の確認と、このままでは日本も中国と同様の結果に至るといふ危機意識である。それは常々亡き師吉田が説いていたことの実体験であった。もともと高杉が実践主体の行動型知識人でなければ、上海での経験もさしたる影響をもたなかったであろう。しかし彼の場合、その実践性故に「狂」が顕在化する。『外情探索録』の清人との筆談の中に次のような発言が見える。

「弟、頗る狂生、興に乗じて暴言を發す」(『外情探索録』)  
 ここで高杉は自らを「狂」と評し、また次のようにも言っている。

「常に貴国の奇士王守仁の人と為りを欽慕す」(『外情探索録』)

王守仁(王陽明)の名が見えることから、高杉の言う「狂」が陽明学的な「狂」であることが認識せられるが、もちろんこれは吉田的な、つまり吉田によって潤色された「狂」であると考えるのが自然であろう。また次のような一節もある。

「采薇觀菊、皆是狂なり。近世此狂なし。故に聖道凌夷せらる。……」(『外情探索録』)

「采薇觀菊」は、伯夷・叔齊と陶淵明とをさす。<sup>(22)</sup>ともに隱逸的在り方を示すものとして、日本に於ても広く知られた人物である。「狂」と一見相反して捉えられがちな概念であるが、実は同じ心情の異なる現れである。<sup>(23)</sup>これらの「狂」の淵源は古く、『論語』に次のような文が見られる。

「子曰く、古者は民に三疾あり。今や或は是れも之れ亡きなり。古の狂や肆、今の狂や蕩。古の矜や廉、今の矜や忿戾。古の愚や直、今の愚や詐のみ、と」(『論語』陽貨)

「子曰く、中行を得て之に与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取る。狷者は為さざる所あり」(『論語』子路)

また『孟子』は次のように「狂」を伝える。  
 「(万章)曰く、……何を以て之を狂と謂ふや、と。(孟子)曰く、其の志嚶嚶然たり。古の人、古の人と曰ふも、其の

行ひを夷考すれば、焉を掩はざる者なり」(『孟子』尽心下)  
 また『論語集注』には「狂」に「狂とは、志願の太高なるなり」「狂とは、志極めて高くして行ひ掩はれざるなり」という注釈がほどこされている。ここに示される「狂」概念を総合すれば、およそ次のような定義付けができよう。つまり「狂」者とは、決して背徳的な負のイメージではなく、高い志をもつて、妥協することなく、己の信ずる所を行う者なのである。そしてこの「狂」は、単に『論語』解釈史のみならず、歴史的にも、古代より評価されるべき者として位置付けられ、正史には独行列伝という項が設けられて、狂者を語り継いでいくようになる。とりわけ、その先駆けとなった『後漢書』独行列伝では、『論語』を引用しつつ次のような文を冒頭に置く。

「孔子曰く、其の中庸を得て与せずんば、必ずや狂狷か、と。又た云ふ、狂者は進みて取る。狷者は為さざる所あり、と。此れ蓋し周全の道を失ひて、諸を偏至の端に取れる者なり。然らば則ち為さざる所あるも、亦た將に必ず為す所あらんとする者なり。既に進みて取ると云ふも、亦た將に取らざる所あらんとする者なり。此の如きは、性の尚ほ分流して、為否の適に異なるなり」(『後漢書』独行列伝)

また陽明学に於ては「狂」は次のように語られる。  
 「我、今這の良知を信じ得ば、真是真非は、手に信せて行ひ去き、更に些かの覆蔵を著けず。我、今纔かに箇の狂者の胸次に做り得たり。使し天下の人、都て我が行いは言

を掄<sup>お</sup>はずと説くも也<sup>ま</sup>た罷<sup>や</sup>めん」(『伝習録』巻下一一二)

ここで陽明は、良知の命ずるままに実践する主体を「狂者」と呼び、世俗の声に左右されることのない一者と規定している。また『伝習録』巻中の顧東橋宛書簡の中に見られる「抜本塞源論」の「豪傑の士の、待つ所なくして興起する者」<sup>(24)</sup>も同義とみなしてよからう。

ここに陽明学的な「良知」の発現を「狂」概念とともに位置づけ、さらにそこに吉田的な「狂」が付加される。たとえば『講孟劄記』巻四の下に次のような形で吉田の「狂」解釈が見られる。

『孟子』尽心下篇の「孔子は、中道を得て之に与せずんば、必ず狂猥<sup>わう</sup>か」を引いて、最上を「中道の士」、次を「郷原の人」とし、「猥者」「狂者」は決してよいものではないとしながらも、孟子の生きた乱世の時代を考えれば、「猥者」や「狂者」でなければ道を行い守ることはできなかったとする部分である。

「孟子戦国の時に生まれ、其の道遂に流俗汙世に合はず。……孟子の任、至重至大、必ず氣力雄健、性質堅忍の士を得て、其の盛業を羽翼するに非ずんば、何ぞ其の任を負荷するを得んや。是を以て孟子の狂者を重んじ、猥者を之に次ぎ、郷原を惡むの心事を付度すべし。孔子と雖も亦た同じ」

そして、幕末の今も孟子の生きた戦国時代と同様であるとし、「是の時に当りて中道の士の遽<sup>にわか</sup>に得べからざるは、古今一

なり。故に此の道を興すには、狂者に非ざれば興することあたはず。此の道を守るには、猥者に非ざれば守ることあたはず。則ち其の狂猥を渴望すること、亦た豈に孔孟と異なるや」<sup>(25)</sup>と述べている。

以上のような危機的時代に於ける「狂者」の実効性を説く思想が、上海渡航によって高杉の中で、具体的な形で結実し、彼は帰国後一変した姿を見せることになる。ただし、それが単純な攘夷論でなかったことは確かであり、このことは

単身嘗<sup>あ</sup>支那邦 単身嘗<sup>あ</sup>支那の邦に到る

火艦飛走大東洋 火艦飛走 大東洋

交語漢韃与英仏 語を交ゆ 漢韃と英仏と

欲捨我短学彼長 我が短を捨てて彼の長を学ばんと欲す

(「無題」元治元年四月七日)

という詩の「我が短を捨てて彼の長を学ばんと欲す」という語がよく物語っている。<sup>(27)</sup>

さてこの上海渡航以後に高杉詩に発現する「狂」「儉生」について次章で言及してみたい。

### 第三章 「狂」と「儉生」

本章では高杉詩を考える場合に最も重要な位置を占める「狂」と「儉生」という二つのモチーフについて考えてみたい。そしてこの二つのモチーフが、先の上海渡航と大きく関

わっていることは言うまでもない。

## 一 「狂」に関して

高杉晋作が名のつた雅号の中には「狂生」「狂夫」「東洋一狂生」「西海一狂生」「東狂」等、「狂」字を冠するものが多く存する。先にも少しく言及したように、この「狂」は師吉田はもとより、多くの志士たちが詩中に使用したモチーフではある<sup>28</sup>。しかし、それが現実と相即不離に結びついていたかは別の問題である。

さて高杉の「狂」概念は、明らかに上海より帰国した後に発現したものである。というのも高杉には渡航前年に次のような詩作があるからにほかならない。

不問人間狷与狂 問はず 人間の狷と狂と  
致誠塵世是忠良 誠を塵世に致すは是れ忠良  
請看紅紫満園色 請ふ看よ 紅紫満園の色  
独有桜花存国光 独り桜花の国光を存するあり

〔有執御命、賦小詩二首、録一〕文久元年三月十一日

ここで一句目に第一章に於て言及した『論語』の「狷」と「狂」の概念が提示されている。二句目との関わりから、荒廃した時代に「誠」を貫くことが問われるのであり、その際、「狷」「狂」は問われるべき事ではないとする高杉の心情を読み取ることができる。しかしながら、ここでは明らかに「忠良」「誠」に重きがおかれ、形態としての「狷」「狂」への高杉自身の注目度は薄い。

師吉田自身、「狂」を自称した存在であるから、その教えを受けていたことは疑いない。しかし、それが現実に現れるとなると、そこには何らかの契機が必要となつてこよう。高杉の場合、それが上海渡航であった。

さて上海より帰国した後、高杉は狂挙へと走る。帰国直後の七月の無断での汽船購入契約、十一月十三日の横浜の公使館襲撃計画<sup>29</sup>、十二月十二日の御殿山の英国公使館襲撃と留まる所を知らない。彼の胸に去来する「狂」の真意は何だったのか。

まず彼が無断で汽船を購入した際、桂宛の書簡に記した文から見てみたい。

「狂挙の義は在京の節より決心致し居り候事なれ共、……弟狂挙一件の義申し上げず共、国を思ひ君を思ふの心深き人なれば分かる事には候へ共、……右故此の度も断然独志狂放のそしりを顧みず、この狂挙には及び候。一点寸志天下鬼神に負ざる事、我が心に誓ひ居り候」(文久二年閏八月)ここに「国を思ひ君を思ふの心」から、「狂放のそしりを顧みず」に、狂挙に及んだと明示してある。次は横浜各国公使館襲撃を予定していたその日の詩作である。

欲補邦家急 邦家の急を補はんと欲し  
抛身致寸誠 身を抛つて寸誠を致す  
任他塵世客 任他 塵世の客の  
呼我作狂生 我を呼びて狂生と作すに

〔十一月十三日、将赴金沢斬夷人〕文久二年

この詩では「狂生」が「塵世の客」と対比されて詠まれている。「塵世」たる「邦家」に「寸誠」を貫くという行為に対し、世間の者たちが私を「狂生」と呼ぶことなど気にはとめない、というものである。ここに高杉が言う「狂」は極めて相対的な概念であり、それは世間一般との認識の差から生じたものと見る事ができる。したがって、その「狂」は「一般人とは異なる」という意を含んでいる。即ち「目覚めぬ大衆」と「目覚めた一者（自己）」との対立という図式の提示である。上海での実体験に裏打ちされた、すなわち見せかけのスタイルでも、単なる詩作上のモチーフでもない「狂」を詩中に見て取ることができる。先の詩との差異は、前者が自らの「狂」を問わず、しかも桜花に目をやる余裕があるのに対し、後者は「邦家の急」の語に象徴されるように、自らの「狂」に対する自覚的な開き直りが感じられる点にあらう。

これは以下三句についても同様である。

為国破産家亦軽 国の為に産を破る家 亦た輕し

不辭世上喚狂生 世上の狂生と喚ぶを辭せず

友人猶有不忘義 友人に猶ほ義を忘れざるあり

昨日門頭呼我名 昨日 門頭に我が名を呼ぶ

（「囚中作」 元治元年五月六日）

宿志平生有所期 宿志 平生 期する所あり

放狂不管世人疑 放狂 世人の疑ひに管せず

秋風昨夜吟魂冷 秋風 昨夜 吟魂冷やかなり

独立江頭折柳枝 独り江頭に立つて柳枝を折る

（「謾吟」 慶応元年八月中浣）

我生奇節士 我が生は奇節の士

異于世塵人 世塵の人に異なる

訪汝遂何事 汝を訪ぬるは遂に何事ぞ

惟將愛其心 惟だ將に其の心を愛さんとす

（「訪偉娘喜世子即吟、楠樹逸史」 慶応二年一月）

それぞれ「世上」と「狂生」、「世人」と「放狂」、「世塵の人」と「奇節の士」とが対比させられている。すなわち高杉の「狂」とは、彼の絶対的「狂」を意味するものではなく、世俗との対立の中から生まれた、数少ない覚醒者としての相対的「狂」に他ならないのである。

そして、「狂」であるが故に、この時勢に対応できるとするのが次の詩である。

内憂外患迫吾洲 内憂外患 吾が洲に迫る

正是邦家存亡秋 正に是れ邦家存亡の秋

將立回天回運策 將に回天回運の策を立てんとす

捨親捨子亦何悲 親を捨て子を捨つ 亦た何ぞ悲まん

（「題焦心録」 元治元年十月頃）

内姦如狼虎 内姦は狼虎の如く

外賊是豚羊 外賊は是れ豚羊

烽火四隣起 烽火 四隣に起り

亦当發我狂 亦た当に我が狂を發すべし

（「次某韻」 慶応元年六月五日）

いずれも「内憂・内姦」「外患・外賊」に対処するには「狂」

でなければならぬ、という詩想が存する。前者には「狂」という概念は見えないが、「親を捨て子を捨て」というフレーズは、世間的常識からの逸脱を示唆するものであり、意味するものは、「狂」と等しい。

## 二 「儉生」に関して

高杉詩を考える場合の、もう一つの重要なモチーフが「儉生」である。これはたとえば『論語』衛霊公に

「子曰く、志士仁人は、生を求めて以て仁を害することなし。身を殺して以て仁を成すことあり」とあるように、志士とは、自らが死ぬことによって仁を成就

できる時には死を選ぶ存在であり、そういう時に何もせず生きながらえることを「生を儉む」とするのである。

この記述以来、「生を儉む」ことは、志士として最も恥ずべき行為として語られることになる。高杉詩にも「儉生」をモチーフとしたものは多数見られ、それは上海渡航以前より存する。

好得故人為佚遊 好し故人を得て佚遊を為す

新詩佳酒可消憂 新詩佳酒 憂を消すべし

唯慙身与歳時老 唯だ慙づ 身の歳時と与に老ゆるを

心事齟齬夏又秋 心事は齟齬す 夏又秋

（「贈寺島生」文久元年六月一日）

自慙少壮老無為 自ら慙づ 少壮無為に老ゆるを

身苦俗彊又怨誰 身は俗彊に苦しむ 又誰をか怨まん

人世浮沈順逆事 人世の浮沈 順逆の事  
一任天命与天資 一に天命と天資とに任ぜん

（「和作来訪乃賦小詩」文久元年六月二十日）

しかし、これらの詩を見ると、「儉生」が単なる詩作上のモチーフとして用いられていた感がある。というのも、両首に見える「唯だ慙づ、身の歳時と与に老ゆるを」「自ら慙づ、少壮無為に老ゆるを」というフレーズは、本来若い時に実感を以て語られるものではない。加えて、真の「儉生」という認識は、「死を決す」べき状況に於て、それをしなかった際に初めて生まれるものであるからに他ならない。上海に渡航して高杉は、初めて師吉田の教えを実体験する。すなわち「大事」の明確な認識は上海で為されるのである。したがって、渡航以前の高杉にとって「儉生」が詩作上の常套語以上の何ものでもなかったことは想像に難くない。それは帰国直後の桂宛の書簡の中にはっきりと記されている。

「勤王の志は一朝一夕の事にはござなく候。必竟今日までは儉生仕り候は、成る丈には国と与に仕りたき故にござ候。国と与にするの時節は今日を失ひては千万年待ちてもござなき義と存じ候」<sup>33</sup>（文久二年八月二十六日）

生を投げ出す（仁を為す）べき時は今をのぞいて他にはない、とする高杉の認識が、ここに明確に述べられている。これを境に、高杉の「儉生」概念は単なる詩作上のモチーフではなく、実感としての強い嫌悪感の対象として述べられていくようになる。



五十馭程幾往還 五十の馭程 幾たびか往還す

更慙狂士老塵間 更に慙づ 狂士の塵間に老ゆるを

客窓夜々寒燈下 客窓 夜々 寒燈の下

夢裏猶看故国山 夢裏 猶ほ看る 故国の山

〔途上偶感〕文久二年二月上旬

儉生決死任時宜 生を儉むも死を決するも時宜に任ず

不患世人論是非 世人の是非を論ずるを患へず

嘗在先師寄我語 嘗て先師の我に寄するの語在り

回頭追思淚空垂 頭を回して追思すれば涙空しく垂る

〔囚中作〕元治元年四月十一日

酬国胆心万古存 国に酬ゆる胆心 万古に存す

儉生愧我負鴻恩 生を儉んで愧づ 我が鴻恩に負くを

〔毛利登人平生議論与穴戸合、憶其決死之心、亦応同也〕

慶応元年五月

同舍友朋尽忠死 同舍の友朋 尽く忠死し

独君与我有儉生 独り君と我とのみ生を儉むあり

合心従是嘗辛苦 合心 是より辛苦を嘗めん

欲学景清与幸盛 学ばんと欲す景清と幸盛と

〔贈佐世八十郎〕慶応元年九月

いずれも「儉生」をモチーフとしたものではあるが、上海渡航以前とは趣を異にしている。とりわけ慶応元年に詠まれた三首目と四首目には師吉田の恩に報いることなく生き続けていることへの、そして前年の元治元年の禁門の変に関連して忠死した久坂玄瑞・来島又兵衛（一八一六―一六四）・真木和

泉（一八一三―一六四）・毛利登人（一八二一―一六四）などの朋友に遅れをとって生き続けている事への慚愧の念を読み取ることが出来る。この後死に至るまで、高杉は一方で労咳に侵されながら、自らが最も嫌悪した「儉生」に自らが身を置いていることへのジレンマと戦いつつ生きることになる。次章では、そういう状況の中で新たに隠棲志向が発現する彼の末期の詩作を考えてみたい。

#### 第四章 末期の詩作

慶応年間の頃、高杉は長州藩の海軍総督という地位にあった。しかしながら、労咳の病状は日増しに悪化し、慶応二年十月には、その職も解任される。たとえば前原彦太郎（佐世八十郎、一誠・一八三四―一七六）宛書簡中には、

「小生も先日、酒樓まかりこし候日より、少々発熱の気相鎮まり候ところ、又々胸を痛み昨日は少々たんへ血もまじり候位の事ござ候」〔慶応二年十二月二十一日〕

とあって、病状の進行が確実に高杉の身体を犯していることを伺い知ることが出来る。そういう状況の時、それまでの高杉には見られなかった「逸民」への志向が詩中に垣間見られるようになる。その前後の詩作を考えてみたい。長州藩家老から放蕩をたしなめられた際の詩作である。

東国形情未可謀 東国の形情は未だ謀るべからず  
潜心只待起兵秋 潜心 只だ待つ 兵を起すの秋

俗人不識佯狂志

俗人は識らず 佯狂の志

内患却多于外憂

内患は却つて外憂より多し

〔游萩城訪悠悠老人〕慶応二年・二月頃

先にも言及したように、もともと高杉の「狂」は「世俗」の対立の中で語られ、その俗世の理解を求めるような性質のものではなかったはずである。たしかに、この詩も「俗人」と「佯狂（いつわりの狂）」との対比ではある。しかし、ここで注目すべきは「佯狂」と言つて、自らの「狂」を偽りのものとしている点にある。本来、良知の発現による「狂」に真も偽も存在するはずはなく、ここで高杉が「佯狂」と言い、自らの「狂」を偽と言うことは、先の相対的「狂」概念とも関連して、彼の理解者のいない孤独感によって吐露された、いわば弱音にほかならない。このことは四句目の「内患（目覚めぬ日本人）」は「外憂（諸外国の圧力）」よりも多いとする語句からも明らかであろう。

加えて当時の高杉は、病身故に「狂」を行為として現実社会に示し得なくなっていた。これはまさに高杉が最も嫌悪した「儻生」にほかならず、加えて理解者もない彼は、晩年ジレンマと孤独感の中で生き続けなければならなかった。とりわけ、孤独感は次のような形で詩作上にも現れている。

万物元来有始終

万物 元来 始終あり

人生況少百年躬

人生 況や百年の躬 少なし

競名争利営営没

競名争利 営営として没す

不識何娛存此中

識らず何の娛しみか此の中に存せん

〔終宵難眠、寤寐之間、得七絶三首〕慶応二年十一月

「万物 元来 始終あり」という『周易』的なフレーズの<sup>35)</sup>

中に、高杉の死の意識を読み取ることができる。加えて「競名争利 営営として没す 識らず何の娛しみか此の中に存せん」というフレーズには、名誉や利益を求める事への虚無感があり、それは先の詩に見えた高杉の心情の証左ともなる。

また次のような詩も見える。

売刀買山住

刀を売り山を買うて住む

閑臥独怡怡

閑臥して独り怡怡たり

多病雖辞客

多病 客を辞すと雖も

寸心豈負時

寸心 豈に時に負かんや

作書書更拙

書を作せば書更に拙

探句句成遅

句を探れば句成ること遅し

恨我少年日

恨むらくは 我 少年の日

学兵不学詩

兵を学んで詩を学ばざるを

〔山中偶成〕慶応二年十一月頃

かつて「区々として腐儒を学ぶ」と詠んだ高杉自身の自らの人生への回顧である。心和らいた状態の中で、初めて高杉は自らを振り返る余裕を得たと言える。加えて上記二作にはこれまで見られなかった「終」の意識・「怡怡（心和らぐさま）」の心境という詩情が盛り込まれている。

最後に慶応三年四月十日に没する高杉の、同年の詩句を見、彼の死直前の詩想を考えてみる。まず慶応三年元旦の詩作を見てみたい。父宛の書簡中に見えるものである。

遁世無用人間礼

遁世には無用なり 人間の礼

不帽不袍只穩睡

帽せず袍せず 只だ穩睡す

市中君子頻奔馳

市中の君子は頻りに奔馳し

山裡病夫夢結時

山裡の病夫は夢結ぶの時

入門剝啄投刺去

門に入り 剝啄 刺を投じて去る

初知今朝是元日

初めて知る 今朝は是れ元日なるを

〔拙策二首（一）〕慶応三年元日

ここにはつきりと上海渡航後に見られた「世俗との対立」から「世俗からの逃避」への変化を見て取ることができる。そして「人間の礼」「時間の枠」が自分には無用のものであり、「隠睡して夢を結ぶ」ことを主意としている。この「隠睡」を破る者が他ならぬ鶯であった。死直前に詠まれた次の詩である。

一朝檐角破残夢

一朝 檐角に残夢を破る

二朝窓前亦弄吟

二朝 窓前に亦た弄吟す

三朝四朝又朝朝

三朝 四朝 又た朝朝

日日懇来慰病痛

日日懇来し病痛を慰む

君於方非有旧親

君は方に於て旧親あるに非ず

又非寸恩在我身

又た寸恩の 我が身に在るに非ず

君何於我誤看識

君何ぞ我に於て看識を誤る

吾素人間不容人

吾素人間 人に容れられず

故人責吾以詭智

故人 吾を責むるに詭智を以てす

同族目我以放恣

同族 我を目するに放恣を以てす

同族故人尚不容

同族 故人 尚ほ容れず

而君容吾遂何意

而るに君 吾を容る 遂に何の意ぞ

君勿去老梅之枝

君 去るなかれ 老梅の枝

君可憩荒溪之涓

君 憩ふべし 荒溪の涓

寒香淡月我所欲

寒香淡月は我が欲する所

為君執鞭了生涯

君が為に鞭を執つて生涯を了らん

〔数日来鶯鳴檐前不去、賦之与〕慶応三年二月初後

「隠睡」する自分の「残夢」を破る鶯の設定である。この詩は、単純に夢うつつの状態の時、鶯の鳴き声で目覚めたことを意味しない。というのも、最末尾部の「君が為に鞭を執つて生涯を了らん」という語が、「残夢を破る」と対応しており、鶯の鳴き声によって、「故人」「同族」から容れられなかったことによる孤独感を超克し、高杉は再び「狂」として終わることを決意しているからである。

自らを「狂」として生きてきた高杉の、死を前にした独白である。毎朝美しい鳴き声を伝える鶯とはうらはらに、「狂」として世に抗い続けてきた自分に「故人 吾を責むるに詭智を以てす」「同族 我を目するに放恣を以てす」とあるように周囲の目は冷やかであった。結局、誰からも理解されず孤立無縁となり、「隠睡」に入った高杉は、鶯によって「残夢を破られ、再び戦場へ赴く決意をする」という詩意である。

おわりに

誰からも理解されることのなかった「良知」に発現する高

杉の「(佯)狂」の背後に存した真意、それは師吉田から教えられ、そして上海で追体験した「偷生」への嫌悪であった。自らを「目覚めた一者」として位置づけ、俗世を「真狂」としたことの当然の帰結として、彼は常に孤独感にさいなまれた。そして、この孤独感がさらなる「狂」を誘発した。それでも高杉が生きていけたのは、辞世の句として有名な「おもしろきこともなき世をおもしろく」という精神であった。すなわち高杉の「狂」は、世俗との対立を意味すると同時に、そこから生まれる孤独感を正当化する自浄能力をも有していたのである。いわば彼は「狂」を名のった真の「狂」であり、それは純粹な「良知」の発現者であったことを意味する。その意味に於いて、野村望東尼<sup>36</sup>(一八〇六―六七)の「すみなすものは心なりけり」という下の句は、まさに高杉の理解者と呼ばれるにふさわしいものと言えるのではないだろうか。

さて高杉詩を通観すると、筆者が先に対象とした雲井龍雄(二八四四―七〇)との詩作上の近似性は否定できない。ともに強者に抗う一者としての色彩が濃く、また「偷生」への嫌悪も強い。<sup>37</sup>確かに高杉には雲井ほどの典故の豊富さはない。したがって、詩そのものもつイメージの広がり、雲井の方が豊かであると思われる。しかし、高杉には上海渡航という経験に裏打ちされた迫力が詩上に感じられる。

しかしながら、雲井が東北の米沢、高杉が長州という地域の違い、或いはそれに伴う立場の違いが、次の二点に於て、

両者の詩想の差違に影響していることが確認できる。第一は、高杉詩に頻出する「内憂外患」という意識、すなわち列強の前に揺れ動く日本という視角は、雲井の詩作には見られない。雲井の敵は常に薩長であった。極めて近似した性情を有した(肺を病んでいたという共通点もある)二人が、維新时期に於ける敗者と勝者(高杉は敗者として終わるが)となり、詩作の上に於てもその影響が見られることは実に興味深い。これはたとえば隠逸を志向する際に雲井が「嘉遯」と言い、長州藩の大楽源太郎(一八三四―七一)が「肥遯」という違いにも通じるものであろう。<sup>38</sup>

また第二に、先にも少しく言及し、第一点とも関わってくる問題であるが、渡航や諸外国との接触によるグローバルな視野の有無、具体的な将来的ビジョンの有無が詩作にも大きく影響してくる。この視点は雲井詩には全く見られないものである。

これらは個人の性情を超えた所で作詩に大きく関わってくるものと考ええる。そして幕末維新期の志士たちを同時代人として視た上で新たな枠組みを設定する際の方向性を示唆している。

両者へのアプローチの結果得られたことが、普遍性を有するか否かは、他の志士達への考証を経た上で改めて論じてみたい。

## —註—

## (7)

(1) 渭陽会編『東洋の知識人—士大夫・文人・漢学者—』(朋友書店) 第三部第2章。

(2) これまで各論として筆者が著した論稿として「雲井龍雄研究序説—隠逸と慷慨をめぐって—」(徳島大学教養部紀要・人文社会28)、「自由民権運動期の雲井龍雄の一側面—『土陽新聞』掲載記事をめぐって—」(上下)。(徳島大学国語国文学6・7)がある。

(3) この用語については、秀村選三氏の『薩摩藩の基礎構造』(御茶の水書房)を参考にした。

(4) 筆者が参照した文献は本稿末の参考文献の部分に一括して提示した。

(5) 高杉の詩・書簡等に関しては、堀哲三郎『高杉晋作全集』(新人物往来社)を底本とし、特に詩については高杉晋作記念館所蔵の『東行自筆遺稿』(二種)、『草稿』、『甲子残稿』、『捫蝨處草稿』と対照した。その際、記念館学芸員一坂太郎氏に御助力いただいた。感謝申し上げる。

(6) 東行先生五十年祭記念会編『東行先生遺文』(民友社)所収の年譜(以下「年譜」と略記)の安政四年に「二月十四日、先生萩明倫館入舎生を命ぜらる」とある。また同年に「是年先生吉田松陰の松下村塾に入る」とある。

「腐儒」「俗儒」「迂儒」等、すべて同義である。例を

二三挙げるならば、たとえば新聞『日本』の社説で有名な陸羯南(一八五七—一九〇七)の「不如意行」(『陸羯南全集』巻一〇所収、一九二頁)に

悔信迂陋漢儒説 悔ゆ迂陋なる漢儒の説を信じ

摘章探句殆誤身 摘章探句して殆ど身を誤るを

とある。また勝海舟の『氷川清話』(角川文庫)には「毎度ながらしゃくにさわるのは、今日の漢学者だ。人を感化する道徳も、世を救済する経綸もまるでない

くせに、修身齊家だとか、治国平天下だとか、ほらを吹きまわったり、それでなければ、役にもたない詩賦文章をひねくつたり、よせばよいのに訓詁考証にこせこせしたり、それでいて、当人はあつぱれ天下の儒者だといつてとくいがるのが、おれにはおかしい。こんなやつらはひっきよう社会のごくつぶしだ。居候だ」などである。

(8) 反幕・倒幕・討幕の概念規定については、『思想の海へ(5) —倒幕の思想・草莽の維新—』(社会評論社)に於て寺尾五郎氏が解題で詳細に論じておられる。

(9) 『高杉晋作全集』(上) 所収。一〇〇頁。

(10) 『高杉晋作全集』(上) 所収。四一頁。

(11) 『高杉晋作全集』(上) 所収。六四頁。

(12) 『高杉晋作全集』(上) 所収。七四頁。

(13) 青山忠正氏は『幕末維新奔流の時代』(文英堂)六九頁

に於て「松陰が松下村塾で、門人たちに教えていた内容は、こうしたエネルギーを闇雲な力のままに終わらせず、現実の行動に具体化させていく方法だったのではないか」と述べておられる。

幕末期に行われた四回にわたる幕府の上海遣使については、宮永孝氏が『高杉晋作の上海報告』(新人物往来社)に於て詳細に論じておられる。また奈良本辰也氏の『高杉晋作』(中央公論社)、田中彰氏の『日本の近世(18)』第4章「幕末期の危機意識」(中央公論社)も高杉の上海渡航について詳しく言及しておられる。あわせて参照されたい。

(15)

『遊清五録』の序に次のようにある。

「予は支那行の命を受け、……予因りて策を決し、江戸を発し、崎港に到り、幕吏某に陪従して、支那上海港に遊ぶ。其の間、聞見せし所を録して一冊子と為し、遊清五録と謂ふ。航海日録・上海掩留録・外情探索録・内情探索録・崎陽雜録、是なり」(『高杉晋作全集』(下)所収。一四一頁)

(16)

『高杉晋作全集』(下)所収。一四四頁。

(17)

『高杉晋作全集』(下)所収。一五九頁。

(18)

『高杉晋作全集』(下)所収。一五一頁。

(19)

『高杉晋作全集』(下)所収。一二二頁。

(20)

『高杉晋作全集』(下)所収。二〇七頁。

(21)

『高杉晋作全集』(下)所収。二二二頁。

(22)

「采薇」は『史記』伯夷・叔齊列伝に於ける所謂「采薇之歌」の

登彼西山兮

彼の西山に登り

采其薇矣

其の薇を采る

以暴易暴兮

暴を以て暴に易へ

不知其非矣

其の非を知らず

神農虞夏

神農虞夏

忽焉没兮

忽焉として没す

我安適歸矣

我安くにか適に帰せん

于嗟徂兮

于嗟 徂かん

命之衰矣

命の衰へたるかな

に基づき、「観菊」は陶淵明の「飲酒其五」の

結庵在人境

庵を結んで人境に在り

而無車馬喧

而も車馬の喧しきなし

問君何能爾

君に問ふ 何ぞ能く爾ると

心遠地自偏

心遠く地自ずから偏なり

採菊東籬下

菊を採る 東籬の下

悠然見南山

悠然として南山を見る

山氣日夕佳

山氣 日夕に佳し

飛鳥相与還

飛鳥 相与に還る

此中有真意

此の中に真意あり

欲弁已忘言

弁せんと欲して已に言を忘る

に基づく。

(23)

「隱逸」と「狂」とが相即の関係にあることは註(2)

既出の拙稿「雲井龍雄研究序説」に於て論及した。参照されたい。

(24)

『伝習録』巻中の顧東橋宛書簡に見えるもの。またその淵源は『春秋左氏伝』昭公九年の「伯父、若し冠を裂き冕を毀り、本を抜き原を塞ぎ、専ら謀主を棄つれば、戎狄と雖も其れ余一人に何かあらん」という記述による。またこれについては荒木見悟氏

「活発地な良知の自己内衝動に身を任せる時、もはや世評をかえりみ、右顧左眄する余裕はない。世間から「狂を病み心を喪った」人間と呼ばれてもかまわぬではないか。「天地万物一体の仁は、疾痛切迫、やめようと思っても、おのずからやめられないものがある」のである。こうして陽明はみずからを「狂者」（常識はずれの人間）に位置づけ、豪傑同志の士とともに、手を取り合って、社会悪に挑戦しようと呼びかけるのである」（『近世儒学の発展—朱子学から陽明学へ—』・世界の名著『朱子・王陽明』五三頁・中央公論社）という解説が最もわかりやすい。

(25)

吉田の「狂」に関する認識については、溝口雄三氏の『李卓吾』（集英社）が明解である。氏はそこで李卓吾の「童心説」に対する吉田の「真仮」論に言及しておられる。

(26)

当時の攘夷論が単純に反開国論とは結びつかないことは周知の所であるが、これについては寺尾五郎氏の註

(8) 既出の解説が詳しい。また青山忠正氏は註(13) 既出の著作六二頁に於て、水戸藩や長州藩の対幕府用の政策としての攘夷を「ためにする攘夷」として論じておられる。

(27)

ちなみに田中彰氏は『高杉晋作と奇兵隊』（岩波書店）の中で、同詩を引いて高杉のナショナリズムが単なる攘夷主義ではないことの例証とし、加えてこれらの体験で得た西洋の知識が民兵組織奇兵隊結成の一つの伏線となったと述べておられる。また青山忠正氏は註(13) 既出の著作六五頁に於て吉田の攘夷論に言及し、それを「単に夷狄を攘うのではなく、夷狄を制し、皇国の武威を世界にふるうハイレベルの国家論」と位置づけておられる。

(28)

吉田の「狂」をモチーフとした詩について二三示すと、『東行前日記』に

人譏狂頑兮 人は狂頑と譏り

郷党衆不容 郷党の衆は容れず

あるいは

嗟我狂悖士 嗟 我 狂悖の士

檻車送関東 檻車 関東に送らる

などといった詩が見られる。またこの外、佐久間象山や西郷隆盛、武市瑞山等、「狂」をモチーフとした詩作は枚挙に暇がない。これに関しては嶋岡晨氏が『志士たちの詩』(講談社現代新書)の中で論じておられる。

(29) 「年譜」には「先生、志道聞多・久阪玄瑞等と横浜各

国公使館を襲ひ、外国公使を刺さんとして果さず。尋で其志を貫かんとし之が血盟書を作る」とある。

また『維新史料綱要(4)』(東京大学出版会)、文久二年十一月十三日に「幕府、外国奉行竹本正明・目付沢簡徳ヲ神奈川ニ派遣シ、萩藩士高杉晋作等ノ暴挙ニ備ヘシム」(『枢密備忘』)、「是夜、萩藩世子毛利定広、馬ヲ馳セテ蒲田梅屋敷ニ抵り、藩士高杉晋作等ヲ召還シテ外人襲撃ノ挙ヲ諭止ス」(『武市瑞山関係文書』ほか)とある。

(30) 「年譜」には「先生、志道聞多・久阪玄瑞等と御殿山新築中の英国公使館を焼く」とある。

また『維新史料綱要(4)』、文久二年十二月十二日に「萩藩士高杉晋作・同久坂玄瑞・同有吉熊次郎・同大和弥八郎・同長嶺内蔵太・同伊藤俊輔・同白井小輔・同赤禰幹之丞・同堀真五郎・同福原乙之進・同山尾庸造・同志道聞多、御殿山ニ建築中ノ英国公使館ヲ火ク」(『枢密備忘』ほか)とある。

(31) 『高杉晋作全集』(上) 所収。二二二頁。

(32) 吉田の「狂夫の言」の冒頭に「天下の大患は、其の大患たるを知らざるに在り。……」とあり、高杉の「塵世の客」の考え方の基本がここに見られる。

(33) 『高杉晋作全集』(上) 所収。二二四頁。

(34) 『高杉晋作全集』(上) 所収。五七四頁。

(35) 『周易』の「消長」「屈伸」の理論は敗北の中で作詩上のモチーフとして用いられる。もともと人生には浮き沈みがあるという意味合いを持つこの言葉は、作詩者が「長」「伸」の状態にある時はほとんどモチーフとしては登場してこない。たとえば雲井龍雄の「呈息軒先生」(その二)は彼が東京へ檻送され死刑を待つ時に詠まれたものだが、そこにも

天数有消長 天数に消長あり  
人道有隆汚 人道に隆汚あり

という同旨のフレーズが見られる。

(36) 福岡藩の尊攘派歌人野村望東尼と高杉の交友については夙に知られた所である。ちなみに西郷隆盛には「比丘尼に贈り奉る」という詩があり、

雌鷓驚雄戛戛声 雌鷓 雄を驚かす 戛戛の声

頻呼朋友励忠貞 頻りに朋友を呼びて忠貞を励ます

翕然器重邦家宝 翕然 器は重し 邦家の宝

最仰尊攘万古名 最も仰ぐ 尊攘万古の名  
と詠んでいる。

雲井は詩中に於て自らを藺相如・荆軻・張良等に比し、強者に抗う一者を演出する。また

懷沙賦就吾心決 懷沙の賦 就りて吾が心決す

不肯偷生説括囊 肯て生を偷んで括囊を説かず

(「素堂兄在会。詩以戒貞暴憑。歩其韵以答」明治二年) 死不畏死 死しては死を畏れず



生不儉生 生きては生を儉まず

〔述懐〕明治二年

という「儉生」をモチーフとした詩作も見られる。

(38)

「嘉遯」と「肥遯」は、『周易』遯卦の九五と上九の爻辞に見える語である。これについては註(1)既出の拙稿二七三頁でも少しく言及した。いずれ稿を改めて詳細に論じる予定である。

―参考文献― (但し註に記したものは除外した)

- ・ 山口県教育会『吉田松陰全集』(岩波書店)
- ・ 福本義亮『訓註吉田松陰詩歌集』(マツノ書店)
- ・ 倉田信靖『吉田松陰』(明德出版社)
- ・ 遠山茂樹『明治維新』(岩波書店)
- ・ 一坂太郎『高杉晋作漢詩改作の謎』(世論時報社)
- ・ 海原徹『吉田松陰と松下村塾』(ミネルヴァ書房)
- ・ 西郷隆盛全集編集委員会『西郷隆盛全集』(大和書房)
- ・ 安藤英男『雲井龍雄研究詩篇』(明治書院)
- ・ 安藤英男『雲井龍雄全伝』(光風社出版)
- ・ 中川清太郎『西山遺詩』(写本)
- ・ 内田伸『大楽源太郎』(風説社)

\* 本稿は、平成八年五月、九州中国学会平成八年度大会(於純心女子大学)に於て発表したものに、加筆・修正したものである。